

二ユ一ヨ一ク補習授業校

平成二十二(二〇一〇)年度

答辞・送辞

## 送辞

在校生代表 W T A校高等部一年 ストムスキー 将

春、そして咲き誇る桜の花。新しいランドセルを初めて背負った時や、親と校門の前で写真を撮った時にいつもそこにいてくれた花です。ここニユーヨークでも桜は見る事が出来ます。「僕の桜への思い」は、今、前とは少し違う意味をその鮮やかな桜色で表していると云えます。

幼かった頃、桜は単に大きくてきれいで新しい事が始まる春の期待を感じさせてくれました。たぶん満開の美しさだけに心引かれていたのでしょう。でも今の僕は満開の時を経て散っていく桜に寂しさを感じつつも「また会おうね、美しい花をありがとう。」という感謝の気持ちを含めて見つめる事ができるのです。

少し間をおいた一つ一つの固いつぼみが、いつの間にか美しく一緒に枝に寄り添って満開を迎え、でもまた一枚一枚の花びらとなって別々に空に舞っていく様子はちょうど一年前から今日までの高二の先輩達と僕達の姿の様にも思えます。

そう、一年前、高二との初対面の時、僕らは固いつぼみに負けないくらいガチガチになっていました。最初の授業、今でも覚えています。机が二つずつつけてあるので、ペアどうしで座らなくてはならず、それも高二、高一双方の人数がぴったりだったので完璧に二つのグループに別れてしまいました。右サイドは僕らが高一、左は僕達にとって未知な存在の高二です。僕らの間にはアイルがあり、それはいかなる場合でも通つてはいけないような空気が漂っており、しっかりと境目が出来上がっていました。

人間は不思議な生き物です。時間が経つに連れ、いつしか僕たち高等部はW T A校一を誇るにぎやかクラスになりました。桜は一斉に満開です。高等部の絆のきっかけはいつたいたんだったのでしょうか。今でもわかりません。いつ、どうしてこんなにもかけがえのない存在になっていたのだろうか。大げさではありません。本当に家族の様な組織です。こんなにも大切な存在が、たよりにしていた存在が、補習校と言う名の桜の木から離れていってしまいます。

巣立ち、それは今まで当たり前の様にいた環境から自立すること。まだ実感できていない人もいるでしょう。想像してみてください。卒業生の皆さ

んは春休み明けにはもう補習校にはいません。重い教科書も、多少面倒くさい授業も、唯一の息抜きの休み時間もすべて終わりです。これから土曜日の余った時間をどう過ごすのか。想像してみてください。卒業生のご両親はお弁当を作る手間が省けます。金曜日はお酒を飲んでもよし、土曜の朝もお酒を飲んでもよし。そして子供の迎えを心配する必要なんて一切ないのです。想像してみてください。解放された後の楽で自由な土曜日を。そして想像してみてください。なんだか少し物足りない土曜日を。

では在校生である僕達はなにをすればいいのでしょうか。彼らの卒業を祝つて喜ぶべきなのか、寂しさに、別れに涙すべきなのか。嬉しい気持ちと悲しい気持ちのゴチャマゼな心情は僕達も感じています。ちょうど春、桜を見てもう今の僕の気持ちと同じかもしれません。

しかし在校生は甘酸っぱい涙を飲み、迷った感情も乗り越えてきつと、お世話になった卒業生達に心から感謝していると思います。また会おう、集まろう、一緒に枝に華やかに咲いていた事を忘れずに。僕からもこの場を借りて、僕達がお世話になった大切な人たちに、代表となって言わせてください。

高等部二年の皆、僕らが出会った奇跡、一緒に時間を過ごせた喜び、そしていっぱい思い出を僕らにくれて、ありがとう。本当の存在は、いなくても僕たちの「ここ」にいる。そう思います。

## 答辞（I）

LI校初等部卒業生代表 畑崎 理紗

今日この日、卒業という晴れ舞台にいたいこと、こうしてステージの上で大勢の皆さんの前で答辞を読むこと。これは私にとって、「奇跡」としか言いようがありません。

どう考えても優秀な成績を修めたとは言えず、そして人一倍恥ずかしがり屋の私が、先生に答辞を頼まれた時は、

「出来ません。」と断りました。でも家族や先生に励まされ、今このステージの上に立っています。何が私にこのステージに上がる勇氣と自信を与えてくれたのか。それは年中組から六年生まで、補習校に通い続けた八年という年月です。何度なくじけそうになりましたが、あの時、補習校をやめていたら、今日のこの日の達成感は味わえなかったでしょう。

母に連れられ年中組に入園した時は、初めは不安でいっぱいでしたが、工作をしたり歌を歌ったり、また、いろいろな行事が沢山あり、すぐに毎週土曜日が楽しみになりました。ひらがなの読み書きも他の友達よりも出来たので、優越感にひたり、幼児部の二年間は私の「人生最高の時」でした。

ところが、初等部に入って勉強も難しくなり、宿題も多くなり、一気に勉強する意欲がなくなったのです。何よりも、なぜこんな大変な思いをして日本語を勉強しなければならないのか、理由が分かりません。理由が分からないので、当然やる気も起きません。現地校の友達がのんびり自由な時間を過ごしている土曜日に、なぜ余計な勉強をしなくてはいけないのか。しかも土曜日以外の日は、宿題もやらなければなりません。

「母は、後から感謝する日が必ず来る」と口ぐせの様に言ってしまったが、私はアメリカで生まれ育っているので、英語が出来れば生きて行ける！それだけで十分、一体何に感謝するの？そう思っていました。

でも両親にその事で反抗したことは一度もありません。何故かと言うと、今、補習校の中等部にいる二才上の姉が、よく「補習校に行きたくない。」と母に反抗して戦っている姿を見てきたからです。泣いて反抗する姉、それをたしなめる母。まるで恐竜の対決のようでした。私は「言っても無駄だと自分の中のためこみ、我まんして、ストレスに感じたこともあります。

そんなやる気のない私でも、土曜日の朝になるとなぜかわくわくしてしまふ。それは、土曜日にしか会えない補習校の友達がいたからです。同じ境遇で、大変な思いをしている、分かち合える友達です。補習校の友達に会いたい、その一心で、毎週の宿題をこなししていました。

あんなに反抗していた姉も、乗り越えたのか開き直ったのか、今では補習校のカフェテリアで友達と楽しそうにおしゃべりしています。姉も補習校の仲間に支えられて、続けてこられたのだと思います。

今思えば八年間がんばれたのは、つらいこと、楽しいことを分かち合ってきた友人達、日本語に興味を持つように楽しく授業を進めてくれた先生方、いろいろな楽しい行事で盛り上げてくださった、補習校のお父様方、お母様方、優しく見守ってくれた父、時にはテイラノザウルスの様でした。が励まし続けてくれた母の存在です。今日のこの日の「奇跡」は皆さんのお陰です。本当に、ありがとうございます。

私は中等部に進学しますが、今日でお別れの友人もいます。淋しいですが、みんなはかけがえのない仲間、一緒にがんばった日々は忘れません。そして、最後に、「やった！」という達成感でいっぱい今日のこの日を私の「人生最高の時」にします。

## 答辞(Ⅱ)

W T A校初等部卒業生代表 前田 花帆

七年間、二千五百五十六日、補習校で過ごした幼児部からの七年間で、私はいったい何センチ背が伸びたんだろう。

いったい何時間かけて、補習校の宿題をやったんだろう。

四十センチ伸びた身長。何時間やったか数えきれない宿題。

でも、数字なんか関係ないのです。私がこの補習校で学んだ大切なことは数字では表すことができません。

アメリカ人の友達は、よく私にこう聞きます。「補習校で、何を習っているの？」私はいつもこう答えます。「算数や国語、ふつうの学校と同じだよ。」けれど、私が補習校で学んだことは、それだけではありません。

サッカー、バスケットボール、それにラクロスとたくさんのチームに入っている私にとって、土曜日は大事な練習の日です。でも補習校に行くために、練習を休むことが何度もありました。そんな時、私は、「何で？」  
「どうして私だけ？」と思ひ、補習校をやめたくありません。でも、どうしてか、私はやめませんでした。やめなくて良かったと今、本当に、思います。途中で投げ出さないで最後までがんばったからこそ、今、この補習校にさよならを言うのが、涙が出そうなほどこんなにもさみしいのです。

この七年間は、見えないゴールにむかって歩き続ける旅でした。「もうやめたい。」と立ち止まってしまった時に思い出したのは、助けてくれた先生方、友達の笑顔、支えてくれた両親でした。最後まであきらめない、強い心をくれたのです。

この補習校が、私たちみんなに強い心をくれたのです。  
アメリカに住んで、日本語を勉強している私たち。日本語と英語の両方で色々なことを考えている私たちは、十年後、二十年後、いったいどこにいるのでしょうか。日本かもしれない。アメリカかもしれない。もしかしたらアフリカや中国かもしれない。でもどこにいても私たちは強い心を持って、夢に向かって歩いていけるはずですよ。

ここにいる、今日卒業するみんな、本当に会えてよかったです。私は四月から中等部に進み、みんなもそれぞれ、自分の道を選んででしょう。も

う二度と会うことがない人もいるかもしれませんが、みんなは気がついていないかもしれないけれど、私たちはずっと仲間だと思います。今まで一緒にがんばってくれてありがとう。

先生方、見守ってくれてありがとう。お母さん、お父さん、この旅へと送り出してくれてありがとう。一人でここまでやってきた訳ではありません。だから、みんなの力を借りて、未来へ向かう最初の一步を、今、ここからふみ出します。ちよつと背中を押してください。これまでの七年間もそうしてくれたように。そうしたら、きつと、ずっと歩き続けることができます。だから、このW T A校から飛び立つ前に言う最後の言葉、もう一度心から言います。ありがとう！

「補習校は僕の居場所。」四歳の時にアメリカに来て以来、幼児部、初等部、中等部と通って十年、補習校は僕のと真ん中に立っています。今は、ここが僕の大切な居場所と感じています。この思いは、小学生のときにはなかった気持ちです。

現地校の話ですが、僕の通う高校は生徒が二千七百人もいて、その中には会話したり共通しているものがあつたりすると一つのグループとみなされます。ランチの時間に日本人テーブルはここ、と決まっているのも、その一つの現れです。しかし日本人の中にもその一つのグループに束ねられたくない人もいます。中学二年の時、日本から転校してきた友人は、僕達日本人仲間と話したり遊んだり日本人同士いつも一緒でした。ところが秋、高校に入ると、彼はどういう訳か、僕に英語で話しかけるようになっていたのです。僕は、なぜ僕にまで英語で話すのか疑問に思っていました。だが、それには彼なりの大きな決心があるのだらうと思いました。僕が思うに、彼は高校に入るのを境にアメリカ人としてやっていく覚悟を決めたのです。英語で話すことが、最も速くアメリカ人の中に入っていくのに効果的な方法だと考えたからです。日本人同士は日本語で話してもいいと思ふのですが、彼の決心を思うと、彼に「日本語で話せ」とは言えませんでした。一方僕も、彼から、日本では友達同士でどんな会話がされるとか、どんな話題が取り上げられるかなどを知ること、アメリカ人と日本人とはどう違うかとか、自分の中に育っているアメリカ人の部分をどう引き出し、現地校でどう生きていくかなどを考えるようになっていました。こうして、僕達同じ中学から高校に進んだ男子2名は、英語のみを話し、アメリカ人の中に居場所を見つけ、同じように話をし、もの考えるようになりしました。

ところが、こうなると、僕の日本人としてのアイデンティティーを保つことができませぬ。現地校で日本語の世界を手放した僕は、以前よりもずっと日本語の世界が必要になっていました。そして週一度の補習校、この補習校こそが僕が日本人に戻れる場所と強く感じるようになりました。起立、札から始まる授業、日本語での勉強、百人一首大会などの日本の行事、

これらは全て僕の中の日本人を成長させてくれます。日本の漫画を借りて読む時、和風の弁当を皆で食べる時、「自分は日本人なんだな」と感じます。補習校は日本語を「補い習う」場所であると同時に、僕の中の日米両国のバランスをとり、生まれた国と育つ国を融合するものです。同時に、僕はアメリカに暮らしているけれど、アメリカ育ちの日本人だという事を忘れてはいけないと思うようになりました。それは、話すこと、読むこと、書くことという人生の基本を日本語できちんとできなければ、日本人としてやっていけないと思うことでもありました。しかし僕がなにより嬉しく思っていることは、普段、現地校でアメリカ人と付き合っていて、日本人の雰囲気もアメリカ人の雰囲気も漂っている人達、なおかつ、日米両国の言語や文化を両方持っている人達、これらの大きな共通点のある仲間が集まっている補習校で一緒に時をすごせるということです。この仲間こそが、僕にとつてかけがえのない人達なのだと感じます。しかも三年一組はみんな明るくて今までで一番好きなクラスでした。今日一緒に卒業する十七名が皆でチーム一丸となってやっていけて本当に楽しかったです。

また、真剣に授業を教え、辛抱強く僕達を見守ってくださった先生方、補習校のサポートをしてくださった補佐の方々、保護者の方々、そして長い間補習校に送り迎えと弁当を作ってくれた僕達それぞれの両親に心から感謝します。今までお世話になりました。

最後に、中三の皆に。中三のみんな、中三の思い出は、僕の宝。みんな、すばらしい一年をどうもありがとう。進む道は違っても、僕達はここで一緒に学び過ごしたということ絶対に忘れずに、これからもそれぞれの道で頑張っていこう。

## 答辞(Ⅳ)

LI校中等部卒業生代表 金 成美

平成二十二年度、LI校中等部卒業。この言葉を二ヶ月前教室で聞いた時、特別な感情が生まれなかった私。むしろ、「やっと終わる。」と喜びながら、頭の中で万歳をしていたくらいだ。だが、その喜びは、一週間しない間に苦悩へと変わった。

私は、初等部二年生の頃、アメリカに引越してきたときから補習校に通っている。当時、私の学年には生徒が大勢いて、二クラスあったが、中学一年生になった頃は、一クラスになってしまっていた。そして、年頃だったからか、ただヤンチャだったからか、事件をいくつか起こす問題児のクラスのレットルは貼られるは、各科目がどんどん難しくなるは、で、私は補習校に通うのが嫌で嫌でたまらなくなった。

毎週金曜日の夜に、母は、私が、全科目の宿題を嫌々やりながら、文句を聞くのになんざりしたのか、「補習校を辞めたい。」と言った時も反対しなかった。補習校を辞めても、日常生活で日本語を使っているし、身近に日本人の友達も多いので、日本語を忘れることは絶対にありえないだろうという自信があった。

だが、補習校に通わなかったその一年の間にこの考えが大間違いだと思いは知らされた。

補習校に通わなかった一年間、私はアメリカ人の友達とよく遊ぶようになり、英語ばかりを使っていたから、英語力は大幅に上がった。その代わり、日本語力はドツと落ちた。父にも、「成美、日本語下手になったなあ。」と言われ、補習校がどれだけ私の日本語力を保っていてくれたのか、初めて気づいた。「このままでは日本語が益々下手になるだけだ、そんなことは、あまりにも勿体なさ過ぎる。」そんな焦りが出てきた頃、再び、兄と共に復学することにした。

一年ぶりの補習校は、見慣れた顔もあったが、ちらほら知らない顔もあった。それ以外には大して変わったところはなかった。ただ私のクラスにおいては、男子二人と、帰ってきた私の計三人だけだった。「たった三人だけで授業が成り立つのだろうか。」と心配などもしたが、その必要は、

全くなかった。

少人数なので、授業は早く進むし、分からないところがあれば、理解するまで具体的に説明していただくことが可能だった。おまけに、授業中先生と世間話をしたり、日常生活の話をしたり、寒い親父ギャグをかましたり、たった三人だからこそ出来る悠長な授業空間が存在した。

だが、教科書が進むにつれ、内容は難しくなるだけで、現地校では得意な数学も、補習校ではちんぷんかんぷんだった。楽しいときもあったが、授業は、つまらないときがよっぽど多かった。クラスに他の女子が一人も居なかったことも結構応えた。さらに、現地校でのディベートクラブの活動で、補習校を欠席する日も重なった。月に一回欠席するだけでも授業の内容が分からなくなる。そんな状態で補習校に行き、やっとの思いで追いついても、しばらくしたらまたクラブの大会が迫り、また欠席。一年間、この繰り返し。その上、補習校の授業料は安くは無い。もし来年もクラブに参加しながら補習校に通うのなら、一年に約十回分の授業料を損することになる。

中学校卒業が迫り、進学するかどうかの決定をしなければならぬ締め切りも迫る中、「補習校を辞めるか、続けるべきか……」私は迷った。ディベートクラブか補習校、どちらかひとつを選べ、と言われたら断然クラブを選ぶだろう。なぜなら、ディベートクラブは口論、スピーチ、文章の書き方などの重要な技術が磨かれる上、成績がよければ大学に受験するときにプラスになるし、何より、全国大会などの旅行費を除くと、タダという私にとっては嬉しいメリットばかりだ。それに比べて補習校は、正直高いし、授業が楽しくてたまらない訳でもないし、休日なのに早起きしなくてはならないし、ましてや日本人でもない私は、補習校に通わなくてはならない義理もない。なので、中等部卒業と共に補習校を辞めると決心したときは、私は、自分が正しい決断をしたと信じていた。

だが、退学届、進学申込書提出日が迫るほど、「本当に辞めていいのか、後悔しないのか、こんなに悩むのは、誤った決断をしたからなのではないか……」こんなことばかり考えるようになった。そして提出締め切り日、中三全員が退学届、あるいは進学申込書を持ってくるのを忘れてしまい、最終提出日が翌週に延ばされた。

その日、補習校の生活を振り返りながら、他の生徒たちを観察した。嫌々

来ている生徒も居るだろうが、補習校では皆楽しく過ごしているように見えた。高等部に居る友達の中では、「現地校か補習校どちらかしか行けないのなら、絶対補習校を選ぶ。」と言う人や、「卒業しないでずっと補習校に通いたい。」と言う高校二年生も居た。私もそんな風に思えたらいいのに・・・なんて思いながら六時間目の教室に足を運んだ。

六時間目は科学の授業で、授業がよく進むものだから、時々、先生が世間話、人生経験や大学のアドバイスしてくださる時が多かった。その日、たった一人しか高等部に進学しないことをご存知だった。先生は、「あなた達は日本語のレベルも高いし、今補習校を辞めても日本語を忘れることはないと思うけど、せっかく今まで続けてきたのだから、辞めるのはもつたない。私は続けて欲しい。」と仰ってくださいました。この様なことを言われたのは初めてではないのに、なぜか先生に言われたときだけ、グツと来て、補習校を辞めるのがとてもなく惜しい気持ちになった。「補習校を続けたい。」という気持ちが私の中でどんどん膨らんでいった。私は、その感情が消えない様に頭の中で先生のお言葉をリプレイしていた。

数日後、私は母に補習校を続けたいと打ち明けた。そして母は、「退学届けと進学申込書、両方書いておくから、最後までよく考えて、後悔の無い選択をしない。」と言って、本当に二つの用紙を渡した。そして、次の土曜日の朝のホームルームで私は少し戸惑いながら進学申込書を出した。

母は、「後悔の無いように。」と言ったが、それは無理だろう。この先、補習校に行きたくないような日は何回か訪れるだろうし、宿題が分からなくて、イラつくこともあると思う。そう分かっているにも、フォルダーに残った退学届を見るたび、「私は正しい選択をしたんだ。」と小さく微笑むのは、補習校に対して執着心があるからだだろう。そして、補習校が大好きでたまらない高等部の先輩たちが羨ましくて、私も二年後の今日、卒業が惜しくなる位、補習校が私にとってかけがえの無い存在になれたらいいのと思う。

先生方、気まぐれでうるさい私達の面倒をみてくださり、ありがとうございました。今日一緒に中等部を卒業して高等部に進学する宮崎、たった二人でもがんばって二年後の今日、またここに来よう。そして、一緒に卒業するが辞めて行く池田、この一年、君のおかげで楽しい思い出がたくさん

ん出来た。ありがとう。最後にお母さん、私の揺れ動く選択を辛抱強く待ち、毎回、尊重してくれてありがとうございます。L I 校中等部三年一組、計三名、今日、卒業します。

いざこの場に立つてみると、全てが懐かしく感じられます。中学校に入学した時の緊張、山積みになった宿題を見つめる金曜日の夜、現地校の友達への言い訳、「あと何週間で卒業だ」と言うカウントダウン。それらが今日全て終わると思うと、嬉しいのはもちろんなのですが、どこか寂しさを覚えます。

僕が補習校に入学したのは十一年前のこの頃、まだシアトルに住んでいた時でした。生まれも育ちもアメリカであるにも関わらずアニメや漫画等の日本の文化が大好きだった自分にとっては、毎週の授業が冒険のようでした。

しかしそれらの思いも中学校に進学すると共に次第に薄れていきました。現地校の宿題やスポーツ等が忙しくなり、平日に加えて土曜日まで学校など行っていられないと思うようになりました。その上、中三の夏にはニューヨークへ引越越し、新たな環境に馴染めないフラストレーションが積み重なっていきました。

「なぜ僕は日本人なんだ。」

日本人でなければ補習校など行かなくてもいい。日本人でなければ学校の劇で主役になれる。日本人でなければ友達がもつとできる。日本語を捨てたい。もうやめてしまおう。そのような気持ちが毎週胸からはちきれそうでした。

中学三年の終わりが近付いていた頃、僕は退学を決心しました。苦痛からいち早く開放されたいという一心で、届けを提出しました。

ある朝、まだ他に誰もいない教室で僕は担任の先生と自分が進学しない事について話していました。するとある事を問われました、

「後悔はしない？」

人生の中では取り返しのつかない数多の事があります。アメリカで生活しながら日本語の勉強をするという事は十年後に再開できるものではありません。本当に補習校をやめていいのか。今ここで逃げてしまえば、再び日本語の勉強に浸る事はないと僕は気付きました「社会人になってから後悔はしたくない。」そう思い、僕は届けを取り下げました。

高校に進学してからの道は想像以上に険しいものでした。授業が難しかったり、上級生として下級生にどう接していいか分からなかったり、何度もある時やめていけばよかったと思いましたが、それにも関わらず、補習校を終える時になってやっと通い続けていて良かったと言えるようになったのです。本当に「なんで今頃なんだ」と言いたくなるのですが、英語には「There's always light at the end of the tunnel.」と言う慣用語があります。意味は「努力すれば、必ず報われる」と言う、「お説教ください」、「現実知らず」ととてもツツコミ易いものです。もちろん僕自身も思う時もあります。しかし、補習校に通い続けた日々は決して無駄では無かったと僕は断言できます。アメリカに住みながら親の祖国の文化や歴史を学ぶ事によって、主流の見解に振り回されない寛容力と世間を見渡せる目を得ました。そして一生忘れる事のできない人々にも出会いました。補習校の友達や先生方と共に、いかに自分がおもしろいか、つまらないか、頼られているか、未熟であるかを学び、アメリカ人でも日本人でもなく人間として成長する事ができました。十一年間暗闇の中を走り続けた末にたどり着いたのは、その苦勞を知る者しか見る事のできない景色でした。

卒業生の皆さん、僕はこれからどのような道を歩むのでしょうか。例えばそれが別々の方向であろうと、各々の夢を追う事をやめないで下さい。そして僕達に続く後輩達。補習校を絶対にやめるなどは強要しません。宿題がどれだけ大変で、現地校がどれだけ忙しいかを僕が一番知っているからです。ただ、今この舞台から見渡す事のできる式場、この景色をきたら将来見てもらいたいと思うのです。それが十一年間通い続けた補習校に残す、僕の願いです。



「光陰矢のごとし」や「断腸の思い」。皆さんは、これらの意味をご存知ですか。「光陰矢の如し」とは月日の経つのが早いとえて、「断腸の思い」とは腹わたがちぎれるほど、悲しくて辛いこと。こうした故事成語を使えるようになったのは、補習校で漢文を含め、多くのことを学んだおかげです。十一年間の補習校生活を終了する今、ようやくいろいろなことを学ぶ「意義」が見えてきたような気がします。

小学校のころの僕にとって、補習校はとても辛くて、しんどい思いばかりの場所でした。おそらく皆さんと同じように、金曜日の夜泣きながら宿題をしなければならず、ぜんぜん楽しくありませんでした。また、僕のクラスはいつも騒がしく、授業中は先生に怒られっぱなしでした。当然、補習校に行っている意味などまったく理解できず、「やめたい、やめたい、来週こそやめてやる」と思いながら中学二年まで過しました。

僕の周りには、土曜日は補習校以外の活動をしたと辞めて行った生徒、あるいは補習校の先生が嫌いというだけで辞めたものもいます。日本語を習っていても意味がないと思ってしまうことが、補習校を去る最大の理由なのではないでしょうか。今日卒業するみんなも、このことで少なくとも一度は悩んだらうと思います。

逆に、ここにいる僕たちはなぜ卒業まで補習校に通い続けたのでしょうか。親に言われて続けたり、クラスに好きな子ができたり、親友ができたり、頼れる先生ができたりと、続ける理由は人によってそれぞれ違うのではないのでしょうか。

僕が補習校を続けたのは、まず、アニメや漫画のおかげです。アニメや漫画に隠されている偉大な力をご存知ですか？アニメや漫画は、日本語を好きになるきっかけとなります。漫画を読むと、自然に漢字やことわざを覚えていきます。僕の知っている言葉のほとんどは、「名探偵コナン」から来ていると言っても過言ではありません。

次に、先輩と仲良くなったことも、僕が補習校を続けてくれた理由です。補習校で年上の友達ができ、先生や親には話せないことを聞いてくれる人ができるというのは、とてつもなく良いことです。休み時間、先輩と廊下

に座り込んで、だじやれを言ったり、真剣に将来の夢を語り合ったりしました。生徒会長に立候補したのも、先輩たちの勧めがあったからです。先輩たちとの交流を通して、僕は補習校のたてのつながりの強さを感じることができました。

そして、僕の補習校に対する考え方をポジティブなものに変えてくれたのが、クラスの仲間でした。僕の中で一番心に残っているのは、中三の時のボーリング大会。L I 校では毎年ボーリング大会がありますが、その年はたまたま、僕たちのクラス全員が一つのレーンでゲームをすることになりました。みんなと同じ時に同じレーンにボールを何個も転がしたり、足でけてボールを転がしたりと、かなり馬鹿なことをし、みんなで思い切り笑いました。補習校の外でクラスメートとこれほど楽しい思いをしたのは、それが初めてでした。それがきっかけで僕たちは仲良くなり、今でも月に一回ほどは放課後、一緒に遊んでいます。

卒業に際して改めて考えてみると、補習校に行ったおかげで、今の僕がいるのです。大好きなアニメや漫画も、今のようにはすらすら読めないでしょう。けれど、補習校とは、教科書の勉強だけではないのです。たとえいろいろな人との出会いや体験の場所なのです。僕は先輩や、十一年間一緒にいたかけがえのない友達に出会うことができ、補習校が好きになりました。

この場をお借りして、何人かに伝えたいことがあります。まず、「補習校をやめたい」といった僕の言うことを聞かずに、背中を押してくれた、お父さん、お母さん、ありがとうございました。決して真面目ではない僕に、いろんなチャンスを与えてくれた先生達、ありがとうございました。生意気で何も知らない僕にやさしく接してくれた先輩たち、ありがとうございました。くだらなくて、長い僕の話聞いてくれた後輩たち、ありがとう。自分勝手に人使いの荒い、生徒会長の僕の理想に付き合ってくれてありがとう。そしてクラスのみんな、ナルシストでウザくて、変わり者の僕と仲良くしてくれて本当にありがとう。

補習校の十一年間とはまさに光陰矢のごとしでありました。そして今、補習校での生活が終わると考えると、断腸の思いがします。しかし、僕たちにとってこの卒業とは始まりです。悲しい気持ちもあるがそれに負けないほどに、いいことをいっぱい経験したし、これからいっぱいあると思

う。だから皆さん、僕たちを応援してください。